

## 尼崎市立大庄公民館（旧大庄村役場）

- (1) 名 称 尼崎市立大庄公民館（旧大庄村役場）
- (2) 棟 数 1 棟
- (3) 所在地 尼崎市大庄西町 3 丁目 6 番 1 4 号
- (4) 構 造 鉄筋コンクリート造 地上 3 階地下 1 階建（塔屋付）
- (5) 建築面積 約 4 7 7 m<sup>2</sup>
- (6) 延床面積 約 1, 5 6 1 m<sup>2</sup>
- (7) 設計者 村野藤吾（村野建築事務所）
- (8) 施工者 岡本工務店
- (9) 概 要

### ① 建設経過

武庫川下流東側に位置する大庄村は、昭和初期までは漁業と「尼いも」と呼ばれたさつまいも栽培が盛んな農・漁村でしたが、1929（昭和4）年に浅野財閥が設立した尼崎築港株式会社により臨海地域の大規模な埋め立てが行われ、埋立地に大工場が進出してきたことにより昭和10年代には急速に都市化が進み「日本一裕福な村」「日本一の大村」と称されるまでに発展しました。

大庄村では、それまでの木造の村役場が手狭になったことから1932（昭和7）年に新庁舎の用地を取得、村野藤吾に設計を依頼し1936（昭和11）年から新庁舎の建設を開始しました。村野に設計を依頼した理由については、1935（昭和10）年竣工のそごう百貨店の影響や、大庄村に工場を有していた中山製鋼所社長の自邸を村野が設計した縁などが言われていますが、定かではありません。

1937（昭和12）年11月、大庄村役場は竣工しました。建設費は約16万円でしたが、大庄村の同年度の歳出総額は約32万円でしたので、実にその半分もの予算を村役場の建設費にあてたこととなります。もっとも、この年度の大庄村の歳入総額は約69万円でしたので、余剰額だけで十分に建設費がまかなえたこととなりますから、本当に裕福な村だったことがわかります。

竣工した大庄村役場は、鉄筋コンクリート造地上3階地下1階建てで、延床面積は約1,500m<sup>2</sup>でした。竣工した大庄村役場は、翌1938（昭和13）年発行の写真雑誌『アサヒグラフ』や建築雑誌『建築知識』の特集記事で紹介されており、大庄村役場の建物が、当時いかに世間から驚きを持って迎えられていたのかがうかがえます。また、建設当時を知る地元の古老からは、村民たちが日本一の村役場だと自慢していたことや、このようなハイカラな村役場を建てた当時の村長や村会議員は偉かった、いくら考えても訳のわからない不思議な建物だ、などいろいろな思い出話が語られており、大庄村役場が「自慢だけど不思議な」建物として、地域住民に受容されていた様子がうかがえます。

### ② 建物の構成

竣工した大庄村役場の1階には村民が利用する行政窓口や村長室・助役室・応接室等が配置され、2階には事務室や貴賓室、3階には村議会の議場や議員控室が配置されていました。また地下室には石炭燃焼装置があり、冬季にはそこで温められた温水が館内を廻り全館を暖房するようになっていたようです。次頁の写真は、尼崎市教育委員会が所蔵している大庄村役場の竣工当時の写真です。



外 観



事務室（1階）



貴賓室（2階）



議場（3階）



委員会室（3階）



委員控室（3階）

### ③ 建物のその後

1942（昭和17）年、大庄村は東隣の尼崎市に合併されました。これ以降、旧大庄村役場は尼崎市役所大庄出張所（大庄支所）として使用され、1969（昭和44）年からは尼崎市立大庄公民館となり現在に至っています。この間、用途の変更に伴い内部は大きく改変され、1986（昭和61）年に施工された大規模改修工事や1993（平成5）年のエレベーター設置などもあり、建物内部で建設当初の姿を留めているのは2階の旧貴賓室（現、第1学習室）と階段だけになってしまいました。しかし、外観については「塩焼タイル」と呼ばれる外壁を始め建設当初の姿をよく留めています。このような文化財建造物が、公民館として広く市民に活用されながら保存されていることは、近代建築物の保存と活用について全国に誇るべき好例だと言えますので、尼崎市教育委員会では、国登録有形文化財の登録基準「二 造形の規範となっているもの」に該当するものと考え、文化庁長官宛てに意見書を提出しました。

### ④ 建物の特徴

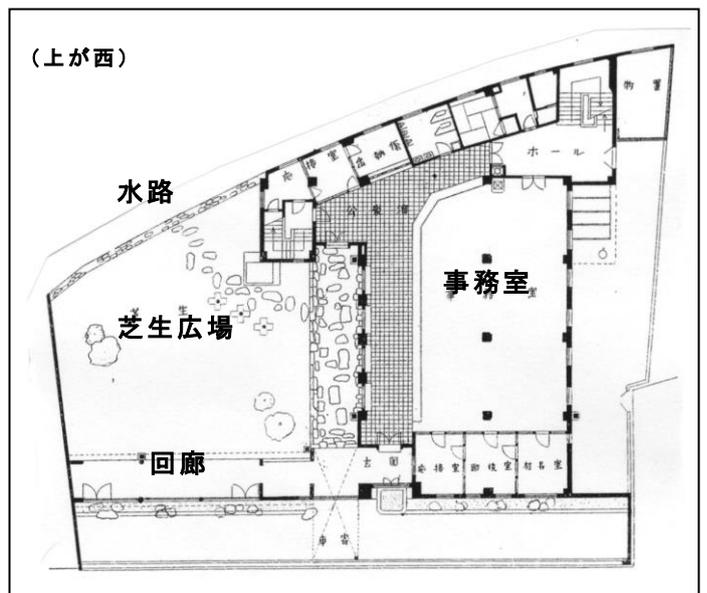
旧大庄村役場は、村野藤吾が独立後、初めて設計を手掛けた庁舎建築として記念碑的な意義を有する建築物ですが、随所に村野の建築思想が反映されています。ここでは、Aコンセプト、B外観、C内部の3点からその特徴を紹介していきます。

#### A コンセプト

村野は1930（昭和5）年にヨーロッパ、アメリカに建築の見学旅行に出かけていますが、そのときに見た建築物のなかでストックホルム市庁舎に最も感銘を受けたと言っています。ノーベル賞の晩餐会が開催される場所として有名なストックホルム市庁舎は、スウェーデン人建築家のエストベリの設計により1923（大正12）年に竣工しました。100mを超える高い塔とともに、回廊で区切られた公開屋外広場が特徴的な市庁舎ですが、村野はこの回廊で区切られた公開屋外広場と

いうコンセプトを大庄村役場で実践したものと推測されます。右図は大庄村役場の1階平面図ですが、建物の南側に芝生広場があり、広場には東側の道路から回廊をくぐり抜けて入るようになっています。建物の出入口も東側道路から直接出入する玄関以外に、広場からの出入口も設けられています。

戦前の庁舎建築といえば、地面にしっかりと根を下ろした、左右対称の威厳ある建築物が主流でしたが、大庄村役場は、当時の日本の庁舎建築の考え方とは全く異なる村民が集える公共空間を有する建築物として設計されたのです。



## B 外観

外観上の特徴としては、まず見る方向によって建物の形状が全く異なって見えるということが上げられます。建物を正面（南東側）から見ると箱型のブロックを組み合わせた形状をしています。裏面（北西側）から見ると、建設当時にあった水路の流れに合わせて1階の外壁が円弧を描き、その上に箱型の2・3階が後退しながら積み重なるという形状をしています。



南から



南東から



北西から

外観のもうひとつの特徴は、レリーフなどの装飾が各所に散りばめられていることです。まず、塔屋の天井には星や雲を模った装飾があり、塔屋の東西の側面には平和の象徴であるオリーブの木の透かし彫りが施されています。



塔屋天井の装飾



塔屋のオリーブの透かし彫り

次に玄関周りの外壁にも特徴的なレリーフが飾られています。まず、玄関の真上にはオリーブの枝をくわえた鳩のレリーフがあります。オリーブも鳩も共に平和の象徴であり、塔屋のオリーブの透かし彫りとも相まって、村野がこの建物に「平和」というキーワードを与えていたことがうかがえます。また、玄関の南側外壁にはグリフィンのレリーフがあります。グリフィンとはギリシャ神話に登場する頭と翼は鷲で胴体はライオンの形をした怪物のことです。鳥と獣のなかで最強である二つの動物の体を合わせ持ったグリフィンは強さの象徴であり、この建物の守り神のような意味があるのではないかと想像されます。

いわゆる「モダニズム建築」では、装飾は不必要なものとして排除される傾向が強いのですが、村野藤吾はこの旧大庄村役場の装飾にも見られるように、モダニズムの方法に依りながらも、装飾を多用した建築家でした。



オリーブをくわえた鳩



グリフィン

### C 内部

内部については前述のとおり旧貴賓室と階段を除いて旧状を留めていませんが、竣工写真を見ると照明器具や家具・調度品までデザインに配慮していることがうかがえます。旧貴賓室は壁面全体がオークのベニヤ板で覆われており平滑な印象を与えますが、細部を見ると象嵌細工による細かな幾何学模様の装飾が見て取れます。また、暖房器具のパネルにはオリーブの装飾が施されています。現在、この旧貴賓室は公民館の学習室として使用されています。このような歴史の香りを残した部屋が、市民の生涯学習のために開放されていることは素敵なことです。

建物内部で村野らしさがうかがえるのが階段です。村野は「階段の魔術師」との異名をとるほど階段や階段の手すりにこだわった建築物をたくさん残しています。特に曲線の階段は村野の代名詞とも言え、村野はホースから水を出してそれを振り回し、水が描いた曲線を見て曲線階段のイメージをつかんだとの逸話が残っています。旧大庄村役場でも階段が緩やかに弧を描き、その曲がり方も階によって微妙に異なり村野の階段へのこだわりがうかがえます。



旧貴賓室



ヒーターのパネル



階段